

2018年5月16日

2024年オリンピック・パリ大会のセーリング種目決定についてご報告

日本セーリング連盟
会長 河野博文

関係者の皆様にご心配をいただいた、2024年オリンピックのセーリング種目に結論が出ました。日本にとって関心の強いダブルハンド（2人乗り）ディンギー（470級）はミックス（男女混合）で残留となり、ウインドサーフィンは男子種目・女子種目とも残留という結論になりました。

以下、この間の経緯と我々の活動をご報告します。

■削減対象になっていた470級

ロンドンで行われたワールド・セーリング（国際セーリング連盟、WS）の中間総会（ミッドイヤーカンファレンス）の最大の議題は、2024年パリ大会のオリンピック・セーリング種目を決定することでした。日本セーリング連盟（JSAF）と国内協会は、470級とウインドサーフィンをオリンピック種目として残すために過去2年近く活動して来ましたが、

なお、WSのレギュレーションにより、2018年5月の中間総会でイベント（種目）を決定し、同年11月の年次総会で艇種を決めることになっています。例えば、ダブルハンドディンギーやウインドサーフィンは種目であり、470級やRS:X級は艇種です。

ダブルハンドディンギーの470級についていえば、普及度においてはシングルハンドディンギーのレーザー級には及ばないこと、性能的にはスキフ種目の49er級と49erFX級、マルチハル種目のナクラ17級に見劣りすると考えるWSの幹部が多いこと、オリンピック種目として残るにはテレビ映りのよい新規性のある種目・艇種の導入が必要と考えるWSメンバーが多いことなどから削減対象の危機にありました。

ウインドサーフィンもカイト（カイトボード）の導入が有力とみられる中で、一時は存続が危ぶまれましたが、JSAFと日本ウインドサーフィン協会は協力して国際ウインドサーフィン協会と危機感を共有し、幅広い活動を展開しました。この結果、カイトとウインドサーフィンは別の種目であるという見解がWS関係者の間でも理解されるようになり、油断はできないものの残留に希望が持てるようになりました。

一方、現在の10種目の中で一時最も危機的な立場にあると考えられたのが重量級男子シングルハンド種目（艇種はフィン級=FINN）でした。シングルハンド種目は、レーザー級

とレーザーラジアル級が男女の対になるのに対し、重量級男子シングルハンド（フィン級）には対となる女子種目が存在せず、IOCの「Gender Equality」（男女平等）という方針の中で、批判的となりました。2020年のオリンピック東京大会では、他の種目の男子選手数を減らし、女子選手数を増やすことで、男子5種目と女子4種目のトータルの選手数を同じにすることで男女選手数の釣り合いを取り、何とか生き延びました。日本もこれをサポートしました。しかし、2024年では種目レベルでの男女平等が求められる中で、フィン級を支持するWS関係者は多く（IOCにも少なくありません）、そのロビイング能力が強いことはわかっていましたが、苦戦は避けられないと思われていました。

昨年来の電話会議を含む何日ものWSイベント委員会とカウンスル会議（評議員会）のやりとりから、上記の理由で470級の残留を支持する方は少なく、新規参入を目指すカイトボード種目と、2024年と2028年のホスト国であるフランスとアメリカが推すキールボート種目（例えば、オーシャンレース男女1人ずつの2人乗り）の挟み撃ちにあって極めて難しい状況が続きました。

■JSAFの提案

2018年2月のカウンスル会議の投票により、ウインドサーフィン（RS:X級）男女、ダブルハンドディンギー（470級）男女、重量級男子シングルハンド（フィン級）の5種目が見直し対象に決定されました（レーザー級、レーザーラジアル級、49er級、49erFX級、ナクラ17級は見直されず）。その際にも、JSAFは「Urgent Message」をWSカウンスルメンバー及びMNA（加盟各国連盟）に発し、5種目ではなく10種目全体を見直しの対象とするようにと主張し、その中で残留のための柔軟性を確保すべく努力しましたが、成功しませんでした。この時点で、もし、カイトボードが男女2種目で採用され、キールボートが採用されるか、カイトボード1種目と男子重量級シングルハンド（フィン）が採用されるかすれば、ダブルハンドディンギー（470級）の残留は計算上不可能となることが危惧されました。

その後、海外のMNA（加盟各国連盟）と様々なチャンネルで内々の意見交換を続ける中で、カイトボードはミックス（男女混合種目）で落ち着く可能性があることが見え始め、470級はミックスとしてならばキールボート（ミックス）と共存できる可能性が出てきました。しかし、フィン級は軽量級女子のシングルハンドの新規導入を合わせて提案することで生き残りを目指し、強力なロビイングを展開しました。これがカイトボードと共に奏功すれば、やはり470級はミックスですら残留が難しくなります。

そこでJSAFは、ダブルハンドディンギー（470級）男女をそれぞれ残す提案（ウインドサーフィン男女、カイトミックスとともに）を第一プライオリティとするとともに、現実的な案としてダブルハンドディンギー（470級）はミックスとし、ウインドサーフィン男女、

カイトボード（ミックス）、キールボート（ミックス）を共存させる提案をしました。日本がこの提案をすることにためらわれましたし、反対する声が内外にありましたが、JSAFが5月の中間総会に乗り込んで主体的にロビイングを展開するためには、この提案がどうしても必要と考えたのです。

また、キールボートは2024年及び2028年のホスト国であるフランスとアメリカが強く求めていたので、2020年の種目決定に際してJSAFがホスト国のMNAとしてWSやIOC関係者と密接に連携して、WSの前会長が突如提起した種目見直しを潰した時の経験から、ホスト国の影響力が相当大きいと期待されたこともあります。キールボートを強く推していたオセアニア州のサポートも期待されました。

この時点でフィン級陣営との協力案があり得たのかもしれませんが、男女平等の観点からフィン級が1種目だけでは生き残れないことを考えると難しいと考えました。しかし、後にフィン級が軽量級シングルハンドとのミックスという奇抜な提案を腹案として持つことがわかった段階で協力の可能性が生まれました。

■種目は決まり、艇種決定は11月に

さて、5月の中間総会には、世界中のMNAと様々なクラス協会から、合計60個のサブミッション（種目の組み合わせ案）が出されました。JSAFからも、2つのサブミッションを出しました。1つはダブルハンドディンギー（470級）を男女別に残す案で、もう1つはダブルハンドディンギー（470級）をミックスにし、キールボート（ミックス）と抱き合わせる案です。残りの3種目は、ウインドサーフィン男女とカイトボード（ミックス）で共通しています。

まず、初日（5月12日）にイベント委員会の提案をまとめました。その過程で470級ミックスを含む案も途中まで健闘しましたが、最終的には、ウインドサーフィン男女2種目、カイトボード（ミックス）、シングルハンド・ショートコース男女2種目が過半数の支持を得て採択され、この段階でダブルハンドディンギー（470級）はいったん消えました。フィン級の支持層が、「重量級」という肩書ではなく、「ショートコース」という新規性を押し出した名称で出現し、これがどのようなレースフォーマットなのかも全く明らかでない段階にもかかわらず過半数の支持をあっさり得たことによって、フィン級の支持層の強さを思い知らされました。

この段階での残された方策は、5月14日のカウンスル会議でこのイベント委員会の提案を否決し、妥協案としてのダブルハンドディンギー・ミックス（470級）とキールボート（ミックス）、またはダブルハンドディンギー・ミックス（470級）とシングルハンドディンギー・ミックス（フィン級と軽量級女子の新艇種）の抱き合わせの、どちらかが生き残れば470級（ミックス）の残留の可能性が出てきます。

私たちは、国際470級協会と協力して、キールボート陣営、フィン級陣営と密に連絡を

取ると同時に、アジア選出のカウンシルメンバーを糾合して 470 級（ミックス）残留案を固めて行きました。

5 月 14 日に行われたカウンシル会議に至る 2 日間及び当日の緊迫した動きは後日の別稿に委ねますが、結局 JSAF の提案したキールボートとの抱き合わせ案は僅差で敗れたものの、フィン級を含むシングルハンドディンギー・ミックスとの抱き合わせ案が勝ち残りました。この 2 案を最後まで残すことが我々の最終的な戦術でもありましたので、柔軟かつ機動的な判断、活動が何とかこの結果に結びついたと考えています。

正直に言って、470 級男子・女子別々に残したいという我々の願いは残念ながら実現できませんでした。関係者、若いセーラーの中には落胆される方もおられることは痛いほどわかりますが、極めて難しい状況の中では、これが我々の実現可能な限界の案だったことをご理解いただきたいと思います。

今回、種目は決まりましたが、艇種は 11 月に決まることになっています。11 月まで何が起こるか分からない面もあり、油断はできません。また、今後この決定を前提として軽量級女子シングルハンドで日本選手の活躍の可能性を求めつつ、戦略を指導していくことが必要と痛感しています。

この間の関係者の皆様の大変献身的な努力、寝る間も惜しんだロビイングに感謝します。

■ WS 中間総会出席者

- 河野博文（JSAF 会長）
- 大谷たかを（JSAF 参与、WS カウンシル）
- 宮野幹弘（JSAF 理事）
- 斉藤愛子（JSAF オリンピック強化委員会）
- 望月宣武（JSAF オリンピック準備委員会）

以上